

ちいき新聞

2021年10月8日号

流山版

VOL.805 発行部数49,855部
総発行部数2,014,288部 全45版
毎週水・木・金曜日配布
購読料無料 / ポスティング

ちいき新聞へのお問い合わせは ☎0120-152-337 ※音声ガイダンスに従ってご用件をお話してください 受付/平日10:00~18:00 ※土日祝日は休み ✉ nagareyama@chiikinews.co.jp

ちいき新聞の公式YouTubeチャンネル! **ちいき新聞 TV**
千葉のグルメ・おでかけスポットなどを中心に動画で紹介!
千葉 LOVE 100%!
あなたと私の真ん中に
~地域とつながるローカルCh~



外壁を彩る圧巻の巨大陶壁

光の館

東武野田線江戸川台駅西口から運河駅方面へ歩いて3分、西浦眼科の外壁を彩る巨大陶壁「光の館」が目飛び込んでくる。圧倒的な存在感を放つ陶壁は線路沿いにあり、車窓からも眺められる。

場所 流山市江戸川台西1-123
問い合わせ ☎04(7155)1771
西浦眼科

九谷興子オフィシャルウェブサイト
☎http://kutanikoshi.net/



江戸川台駅近くにある陶壁「光の館」

ハレー彗星をモチーフに35年前に制作
この陶壁は、西浦慶子院長の義父であり陶芸家の九谷興子氏(享年87歳)が、開院のお祝いを込めて1986年に制作したものだ。眼科だけに作品のモチーフは目玉かと思いきや、76年ぶりの接近で当時話題になっていたハレー彗星からヒントを得たという。上部に描いた彗星から飛び散った滴により命が吹き込まれ、花が咲き、チョウが舞う。宇



ろくろを回し作陶する九谷興子氏



パイプを付け長く改造した筆で色付け(作品は石川県にある「日月陶壁」)

宙空間にさまざまなものが誕生したことを表現した生命力あふれる作品だ。
高さ7m・幅6mもあり、原画は九谷氏の故郷・石川県加賀市に立つアトリエにやぐらを組んで描き、パーツとなる陶器は土をこね、ろくろを回し、窯で焼き上げ一つずつ制

作。最後は江戸川台へ運び、位置をチェックしながら貼り付け、左官屋さん二人三脚で仕上げた。原画を描くだけで4カ月、完成まで1年以上を要した大作だ。西浦院長

は、「どこにそんなパワーがあるのか、制作時はものすごいエネルギーを感じました。今日も作品から発せられるパワーに力をもらっています」と話す。
70歳で陶壁へ挑戦
光の館は75歳で作陶

若い頃から絵画の創作や築窯に情熱を注いできた九谷氏は、1976年に日米文化振興会賞を受賞。日本だけでなく、ミュンヘンやウィーンなど海外5都市の美術館や画廊で個展も開催した。さらに陶器「黄金の腕」で内閣総理大臣賞を、陶画「女たち」で文部大臣賞を受賞するなど、数々の実績を持つ。他にも寺の屏絵や着物のデザインを手掛けるなど作品の幅は広く、なんと70歳で巨大陶壁へ挑戦。ホテルや学校、病院などに12作品を残したというから驚きだ。九谷興子オフィシャルウェブサイトでは、陶壁の制作風景や多岐にわたる作品を見ることができ

(琉)